



TITLE:

海上保険に於ける重複保険填補方法について

AUTHOR(S):

佐波, 宣平

CITATION:

佐波, 宣平. 海上保険に於ける重複保険填補方法について. 経済論叢
1935, 40(4): 728-749

ISSUE DATE:

1935-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130576>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第四號

昭和十年四月一日發行

論 叢

第三史觀の可能性……………

文學博士 米田庄太郎

利子論序說……………

文學博士 高田保馬

時 論

地方交付金配分標準としての人口……………

法學博士 神戸正雄

地方財政の不均衡と其の對策……………

經濟學博士 沙見三郎

研 究

蘇聯國の工業金融制度に就いて……………

經濟學士 大塚一朗

海上保險に於ける重複保險填補について……………

經濟學士 佐波宣平

短期清算取引に於ける代行機關の機能……………

經濟學士 石田興平

說 苑

補助貨幣の供給……………

經濟學士 中谷 實

累進稅率決定に關する一方法について……………

經濟學士 柏井象雄

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

海上保険に於ける重複保険填補方法について

佐 波 宣 平

一、序 言

重複保険 (Double insurance, Doppelversicherung) は海上保険だけに限られるものではなく、廣く損害保険一般に於て見られる事象である。即ち、同一の被保険利益につき同一の危険に對し二つ以上の保険契約が締結せられ、その保険金額の合計額がその保険價額に超過する場合を重複保険といふのである。¹⁾ 併し、ひとしく重複保険といつても、それに對する填補方法は、保険の種別例へば海上保険と火災保険とではこれを異にし、また同じ部門に屬する保険例へば海上保険に於ても、國により準據法規により慣習により、種々に異つてゐる。而して、この稿に於ては、先づ、問題を海上重複保険の填補方法に限定し、次に、その填補方法に關する謂ゆる三つの主義について概括的批判を加へ、終りに、現今行はれてゐる填補方法について理論的吟味をなさんとするものである。

1) Handelsgesetzbuch, § 787. I., Gesetz über den Versicherungsvertrag, § 59. I., Ritter, C., Das Recht der Seeversicherung, Bd. I. S. 267. ff., Sieveking, S., Das Deutsche Seeversicherungsrecht, S. 31., Manes, A., Versicherungslexikon, 1930., S. 447.

二、海上保険に於ける重複保険填補方法に關する三つの主義

上に述べたやうに、海上重複保険に於ける填補方法は國により法規により種々に分たれるが、いま、これを極く大別すれば次のやうに分類し得る。

一、先順位主義 *Prioritätsprinzip* これは契約締結の日時の順位によつて契約の有効無効を決定するものであつて、最初の契約を有効とし、この契約の填補額の如何によつて後順位の各契約の一部または全部を無効とする填補方法である。この先順位主義を採る法規をもつ國としては、佛、米、日等がある。我が商法三八八條に「相次テ數箇ノ保險契約ヲ爲シタルトキハ前ノ保險者先ツ損害ヲ負擔シ若シ其負擔額カ損害ノ全部ヲ填補スルニ足ラサルトキハ後ノ保險者之ヲ負擔ス」と規定するもの即ちこれである。

併し、この先順位主義は、異時の重複保険に對してのみ適用されるのであつて、同時重複保険に對しては行はれ得ない。蓋し、同時重複保険にては契約締結の日時が前後することのないために時間的順序をもつて效力の有無を決定し得ないからである。それ故、この先順位主義を採る場合には、その原則を示す法規と併せて（保險證券に於ては追加約款をもつて）同時重複保険に對する填補方法についても規定して置かねばならない。例へば、先順位主義を採る我が商法に於て上掲の規定に對し三八七條を設けてゐる如くである。

2) Gow, W., *Marine Insurance*, 1917. p. 88.

3) Winter, W., *Marine Insurance*, 1929. p. 180., Huebner, S. S., *Marine Insurance*, p. 71. 72., Ritter, C., a. a. O., S. 278.

4) Winter, W., op. cit., p. 180., Huebner, S. S., op. cit., p. 71.

5) 佛法に於ては、この例外規定は § 359. (Ritter, C., a. a. O., S. 278.)

二、比例責任主義 *proportionelle Haftungs- und Ausgleichungsprinzip* これは、契約締結の時間的

順序を全く無視してすべての契約を有効とし、各保険者はその引受保険金額の割合に應じて責任を負ふといふ填補方法である。即ち、我が商法に於て同時重複保險の填補方法の規定たる三八七條を異時契約の重複保險についても適用せんとするものである。この比例責任主義は、白、蘭、葡、洪、瑞西等の國々によつて採用されてゐる。尙、我が火災保險に於て重複保險に對しこの比例責任主義を用ひてゐるは世上周知の事實である。

三、總額責任主義 *Gesamtschulds- und Ausgleichungsprinzip* この填補方法も、契約締結の時間

的順序を無視するものではあるが、これに於ては各保険者はその引受保険金額の全額を限度として連帶的に支拂の責任を負ひ被保險者の任意に選定する保険者がこれを支拂ふ。而して、その填補額の保険者間に於ける分擔額は各保険者の引受保険金額に比例して定まるのである。この填補主義を採る國は、英、獨、伊等である。いま、この總額責任主義填補並びに分擔方法の最も代表的な規定として英國海上保險法の次の規定を掲げる。

被保險者が重複保險ニ依リテ超過保險ヲ爲シタル場合ニ於テハ、被保險者ハ保險證券ニ於テ反對ノ特約アル場合ヲ除キ彼ノ欲スル順序ニ從ヒ保險者ニ對シ支拂ヲ請求スルコトヲ得⁶⁾。

被保險者が重複保險ニ依リテ超過保險ヲ爲シタル場合ニ於テハ、各保險者ハ自己ノ引受ケタル保險金額ノ割合ニ應ジテ他ノ保險者トノ間ニ比例的ニ損害ノ分擔ヲ爲スベキ義務ヲ有ス⁷⁾。

6) Marine Insurance Act, 1906. § 32. (II. a)

7) M. I. A. 1906. § 80. (I)

保險者ノ一人ガ自己ノ分擔額ヲ超過シテ支拂ヲ爲シタル場合ニ於テハ、他ノ保險者ニ對シ
ノ分擔額ニツキ訴求スルコトヲ得。⁸⁾

(註) この點、前二者の填補主義と異なる。先順位主義並びに比例責任主義に於ては、各保險者間には連帶關係はなく各保險
者は各自獨立の保險契約に依つて負擔するのである。⁹⁾

以下、右の三つの重複保險の填補主義について概括的な批判をなす。

このうち、先順位主義は最も早くより行はれたるものにして、理論上最も正しいといへる。¹⁰⁾ 蓋
し、同一被保險利益につき同一危險に對し既に保險契約が締結せられるときは、その後締結
せられる保險契約が前の保險契約の擔保しない殘額についてののみ有効であり、若し擔保すべき額
のないときには無効となるは當然であるからである。併し、實際上にはこの填補方法は種々の困
難を伴ふ。即ち、先づ、保險者は多數の保險契約を取扱ふに當り契約締結の日時の前後を確認す
るは必ずしも容易のことではなく、¹¹⁾ またこれを確認したりとするも、先順位主義を貫く限り、契
約締結の順位によつて保險料率に高低を設くべきであつて、これは實際上煩瑣に堪え得ざるとこ
ろ、¹²⁾ 更にまた、被保險者の立場よりするも、最初の契約によつて填補を受け若し不足の部分ある
ときその範圍に於て次の契約を有効として填補を受け他の契約を無効とし保險料の返還を受ける
等をなすは、實際に於て非常に繁雜である。¹³⁾ そこで、實際上の運用のためにこの先順位主義を貫
き難くなり、第二の比例責任主義が採らるゝに至つた。

8) M. I. A. 1906. § 80. (II)

9) 水口吉藏博士著 保險法論 p. 500. 501.

10) 藤本幸太郎博士著 海上保險論 p. 275.

11) 北澤宥勝氏、海上保險に於ける重複保險、法學協會雜誌、第40卷第2號 p. 66.

12) 北澤氏、前掲論文 p. 69.

13) 北澤氏、前掲論文、p. 66.

けれども、この比例責任主義は被保險者にとつて非常に不利益な填補方法である。蓋し、被保險者は一方に於て損害の發生に當つて多數の保險者に對し填補の請求を爲さねばならず、他方に於てまた、保險者のうちの一人が支拂を拒むときは、他の保險者は自己の割當額以上はその責任を解除せられることとなるをもつて、被保險者は損害の全額について完全な填補を受け得ないといふ虞れに曝されるからである。¹⁴⁾ よつて、第三の填補方法として次の總額責任主義が起つて來たのである。

總額責任主義は、既述のやうに、被保險者の保護並びに便宜のために生じたる填補方法であつて、各保險者はその引受保險金額の全額について連帶責任を有し、被保險者の填補請求に應じて支拂をなしたる保險者は他の保險者に對して一定の求償權を有するといふのである。この填補方法は實際上最も便宜にして、今日の海上保險市場に於て英國を中心として用ひられるところであり、一九〇一年のグラスゴー會議に於てこの填補方法をして海上重複保險の填補についての國際的統一方法と決定したるために、現在最も有力な填補方法とせられてゐる。

海上重複保險に關する填補方法に於ける三大主潮は大略上に述べた如くである。而して、以上のうち、比例責任主義は、海上重複保險に關する限り、全く採用せられず、先順位主義も、法規上ではこれに遵つてゐる國があるけれども、¹⁵⁾ 實際上には慣習または特約によつてこれに従はずして總額責任主義に倣つてゐる現状である。よつて、この小稿に於ても、前二者の填補方法につい

14) 酒井正三郎氏、海上重複保險論、國民經濟雜誌、第44卷第5號 p. 90.

15) 北澤氏、前掲論文、p. 71.

ては上述の批判にとゞめこれ以上の考察に立入ることをなさず、第三の、現今殆んど遍く採用せられてゐるところの總額責任主義による填補方法について一層深き吟味を加へることとする。

三、海上重複保險に於ける保險金額と保險價額

既に述べたやうに、重複保險は同一被保險利益につき同一の危險に對して數個の保險契約が重複する場合の概念である。而して、既に數個の保險契約の存在が前提條件とされる限り各保險契約の保險金額並びに保險價額が夫々異るといふは自然のことである。

先づ、保險金額についていふに、各保險契約の保險金額が同一である場合は理論上にも實際的にも可能ではあるけれどもこれは寧ろ稀少または例外のことに屬し、普通には各保險金額が異なるべきである。前節にて述べたる各填補主義に於ても、各契約の保險金額は當然に異なるべきものとして「保險金額ノ割合ニ應ジテ」等の文言を使用してゐる。

然らば、保險價額の異同につきては如何。吾々は、前記の各填補主義について見るも、各契約の保險價額の異同については少しも言及がなされず、否、寧ろ、それが同一なるが如くに取扱はれてゐるのを見出す。併し、既に屢々述べたやうに、重複保險に於て數個の保險契約の存在が前提される以上、保險價額に異同の生ずるは當然のことである。蓋し、被保險利益並びに擔保危險は同一であるとするも保險者または被保險者の評價の程度は幾様にも夫々異り得るからである。

この點、火災保險と海上保險とは大いに趣きを異にする。即ち、火災保險に於ては、保險價額は保險事故の發生したるときに事實上決定せられるためにその差異といふことは餘り問題とならない。併し、海上保險に於ては、保險價額は保險契約の開始即ち保險者の責任の開始する時に決定せられる故に、その異同といふことが生ずるのである。¹⁶⁾尤も、かくは言ふも、すべての場合に於て各保險價額が異なるべきものとは限らない。例へば、保險者間の協定によつて同一被保險利益につき同一危險に對してなす保險者各自の評價即ち保險價額を同一とすることは實際上にも可能である。それ故、要するに、重複保險に於ては各保險價額が同一なる場合と異なる場合との二つがあり得る。(このことは保險金額についても同様である。)

右の如く、海上重複保險に於ける保險金額並びに保險價額に關しそれらの異同について述べたが、こゝで、これに關聯して本稿に於ける考察について一言述べて置きたい。

(一) 海上重複保險に於ける填補または分擔が何等かの關係に於て保險金額の割合に應じてなされる限り、各々の保險金額は同一であつても異つてゐても少しも問題ではない。それ故、以下の考察に於ては、各保險金額は異なるものとして論述し、それが同一なる場合について特に言及しない。

(二) 併し、各々の保險價額が同一であるか異つてゐるかといふことは、後に述べるやうに、一方に於て填補金額と關係をもち他方に於て夫々の保險金額と關係をもつために、甚だ重要な問題

16) Ritter, C., a. a. O., S. 269.

を惹き起す。従つて、私は、以下の稿に於て各保険價額の同一なる場合と異なる場合との二つに分つて考察を展開した。

四、各保険價額が同一なる場合に於ける海上重複保険の填補

並びに分擔方法

保険價額が各保険契約に於て同一である場合には、この保険價額と各保険金額合計額とが比較せられ後者が前者に超過するとき重複保険と決定せられる。この場合の填補方法は全損分損いづれに就ても極めて簡單である。

例へば、次の如き重複保険の場合に於て、

保險者	保險金額	保險價額
A	八、〇〇〇 _円	
B	四、〇〇〇	
C	六、〇〇〇	
D	二、〇〇〇	
		一〇、〇〇〇 _円

被保険利益が全損したとする。しかるとき、總額責任主義に於て、被保険者は任意の保険者を選び填補を受けることが出来る。よつて、例へば、被保険者は先づ保険者Cより六千圓の填補を受け残額の四千圓をAより填補されたとする。これによつて保険者と被保険者との填補關係は解決

される。併し、保險者間の分擔關係はなほ未解決のまゝ殘されてゐる。けれども、この分擔關係も上述の規定通り¹⁷⁾に極く簡單に定められる。即ち、次の如くである。

各保險者の分擔額は

$$A. 10,000^{\text{円}} \times \frac{8,000}{20,000} = 4,000^{\text{円}} \quad B. 10,000^{\text{円}} \times \frac{4,000}{20,000} = 2,000^{\text{円}} \quad C. 10,000^{\text{円}} \times \frac{6,000}{20,000} = 3,000^{\text{円}}$$

$$D. 10,000^{\text{円}} \times \frac{2,000}{20,000} = 1,000^{\text{円}}$$

而るに、被保險者に填補金を支拂つたのはA(四千圓)とC(六千圓)との二人だけである。ところで、Aについて見るに、彼は自己の當然に填補すべき額を既に支拂つてゐる。併し、Cは三千圓のところをその倍額たる六千圓支拂つてゐる。従つて、その超過額たる三千圓を他の保險者B並びにCをして分擔せしめるのである。

右の填補並びに分擔方法は、保險價額が同一なるために、損害額(全損分損いづれについても同じ)を單純に各保險金額の割合に按分して分擔額を定めるのである故に至極簡單である。而して、この場合の填補並びに分擔方法を見るに、それは被保險者の保險者任意選定といふところに特徴があるけれども、その分擔割合は比例責任主義に於けると同じである。たゞ、比例責任主義に於ては最初より各保險者に對し決定的な填補割合をもつて臨むに反し、この總額責任主義に於ては先づ任意の保險者をして填補せしめ後に至り各保險者の分擔額を定むるといふ手續上の差異(これは結果に於て重要な差異である)が存するわけである。

17) M. I. A. § 80. (1.) (II.)

五、各保険價額が異なる場合に於ける海上重複保険の填補並びに分擔方法

海上重複保険に於て各保険契約の保険價額が同一なる場合の填補並びに分擔方法は極く簡單であるが、それが異なる場合は可成り複雑困難であり種々な問題を惹き起す。¹⁸⁾ 本稿の主たる目的もこの場合即ち保険價額の異なる場合の填補・分擔の方法を吟味することに置かれてゐる。そして、私は以下の稿を先づ(一)保険者と被保険者との間の填補關係と(二)保険者相互間の分擔關係との二つに分つて考察を進める。

(一)保険者と被保険者との間の填補關係 例を示して説明する。いま、次の如き數個の保険契約が重複して附保せられたとする。

保險者	保險金額	保險價額
A	六、〇〇〇 _円	一〇、〇〇〇 _円
B	二、〇〇〇	四、〇〇〇
C	三、〇〇〇	八、〇〇〇
D	四、〇〇〇	八、〇〇〇

この場合、第一の問題は、これが重複保険を構成するか否かが如何にして決定せられるかといふことである。上述のやうに、重複保険に於ては保険金額の合計額が保険價額に超過することを

18) Ritter, C., a. a. O., S. 269., Arnould, Marine Insurance, 11 ed. § 349. 350.

もつて一つの要件とする。ところで、右の例の場合に於ては、各保険金額の合計額については問題がないが、これと比較さるべき保険價額についてはいづれの保険價額をとるべきかについて問題が存する。海上保険の實際に於ては最高の保険價額をもつて全損の場合に填補すべき額として¹⁹⁾ゐる。従つて、重複保険なるや否やを決定すべく保険金額合計額と比較される保険價額は最高保険價額である。このことは、數個の保険契約のうちのたゞ一つの保険契約に於ける或る保険價額（即ち最高保険價額）の大小によつて、當該保険契約の一群が重複保険を構成するや否やを決定し、従つて保険者各自が填補または分擔すべき額幾何なりやを決定することとなり、後に述べるであらうやうに幾多の困難な問題を發生せしむることとなる。それ故、このやうに、重複保険に於ける全損填補額として最高保険價額をとることとそれ自身、検討吟味すべき重大な問題なのではあるが、この稿に於ては、説明の便宜上、先づこの實際上の仕方は一應許さるべきものとして考察を進め吟味をなすこととし、後段に至つてこの問題に言及することとする。

第二の問題は、各保険價額の異なる場合の重複保険に於て被保険者が最大限度の填補額を得んがためには、保険價額の小さなものより順序に填補を求めなければならぬといふ原則²⁰⁾に關してである。この原則は有名なる一八六三年の *Bruce v. Jones* 事件によつて確立せられたものである。いま、その概略を紹介すれば次の如くである。

この事件の場合、被保険者は次の四つの保険契約を締結してゐた。

- 19) Eldridge, W. H., *Marine Policies*, 1924. p. 92., Clarus, *Notes on Marine Insurance Practice*, 1932. p. 24., Sieveking, S., a. a. O. S., 32., Arnould, op. cit., § 353.
- 20) Ritter, C., a. a. O., S. 271., Sieveking, S., a. a. O., S. 32. 33., Arnould, op. cit., § 351., Clarus, op. cit., p. 24. 25., Dover, V., *A Handbook to Marine Insurance*, 1929, p. 201.

被保險者	保險金額	保險價額
A	七二五 ²¹⁾	三、〇〇〇 ²²⁾
B	五〇〇	二、〇〇〇
C	三、四五〇	五、〇〇〇
D	二、四〇〇	三、二〇〇

被保險者は、全損を受け、先づ被保險者A、B、Cに填補請求をなし合計三、一二六磅一三志六片の填補を受け、更に被保險者Dより填補を受けんと訴訟を起したところ、Dよりは僅に七三磅六志六片だけしか填補せられないとの判決が下された。この七三磅六志六片なる額はDの契約せる保険價額とA、B、Cよりの填補額合計との差額である。

この判決に準據する填補方法は、その後ひろく英國海上保險市場に採用せられ、今日ではその海上保險法に成文として次のやうに規定せられてゐる。

被保險者が評價濟保險證券ヲ以テ填補ノ請求ヲ爲ス場合ニ於テハ、保險ノ目的ノ現實ニ有スル價額ノ如何ニ拘ラズ、他ノ保險證券ニ依リテ受領シタル金額ヲ評價額ヨリ控除シテ之ヲ爲スコトヲ要ス。²¹⁾

これは英國海上保險市場に於て謂はゆる協定保險價額不可爭の原則²²⁾を固守する餘り、重複保險填補に當つてもこの原則を押し貫かうとするために起る結果である。²³⁾即ち、右の例の如く、被保險者はこの重複保險に於て本來受くべき填補額はその最高保險價額たる五千磅であり乍ら被保險者

21) M. I. A. 1906., § 32. (II. b.)

22) M. I. A. 1906., § 27. (II)

23) Chalmers, M. D., & Owen, D., The Marine Insurance Act. 1906., 1907. p. 46.

に對する填補請求の順序の異るといふだけのために三千二百磅 (D) の契約に於ける協定保険價額) だけしか填補を受け得ないといふ不利益に陥ることとなるのであるが、これは、D が、一方に於て他の保險者等と連帶的に自己の引受保険金額の限度に於て損害の填補をなすの責に任じ乍ら、他方に於てはこれと全く矛盾する仕方に於て當該關係保險者全體の填補額が自己の協定保険價額以上に及ぶ必要がないとの理由に據つてゐるからである。そこで、被保險者は、このやうな場合に最大限度の填補を受けんがためには、上述のやうに、保險價額の小さなものより順次にその大なるものへと進みて填補を受けなければならない。例へば、前掲の例に於ては、次の如き

1	B より.....	五〇〇
2	A より.....	七二五
3	D より.....	二、四〇〇
4	C より.....	一、三七五
	合計.....	五、〇〇〇

順序を採るべきである。併し、このことは、「明かに好ましからぬ結果」²⁴⁾「驚くべき異例」²⁵⁾「奇異なる變則」²⁶⁾といはなければならない。本來、最高保險價額に相當する額の填補——しかも各保險者の連帶責任に於ける填補——を受くべき筈のところをたゞ單に填補請求の順序如何のためにその填補額に變動を來たらしむるといふことは、被保險者をして不測の不利益に陥らしむることであつて、當を得たものといふことを得ない。²⁷⁾よろしく、英國海上保險法は、重複保險に關しては、

24) Ritter, C., a. a. O., S. 271.

25) 27) Arnould, op. cit., § 351.

26) Chalmers & Owen, op. cit., p. 46.

前掲の協定保険價額不可争の原則の適用を廢し、もつて、その填補方法の規定²⁸⁾をも改正すべきであらう。この點、同じく總額責任主義を採り乍ら、獨逸に於てはかやうな法規は存在せずかやうな不當な變則は行はれてゐない。²⁹⁾

然らばこのやうな場合、如何なる填補方法が採らるべきであるか。これには二つの方法が考へられる。³⁰⁾ いま、次の如き重複保険の場合があつたとする。

保險者	保險金額	保險價額
A	一五〇、〇〇〇 _円	三〇〇、〇〇〇 _円
B	二五〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇

先の填補方法によれば、被保險者が若し最初にAより全損填補として二十五萬圓の支拂を受くるときは、この填補額はBに於ける保險價額と同額となるをもつて、Bよりは少しの填補をも受け得ないのであるが、これに代はるべき方法としては、

(1) Bが五萬圓(最高保險價額とBの保險價額との差額)を支拂ふ。

(2) Aは既にその保險價額の六分の五を填補してゐる。従つてBは残りの六分の一を填補すべきである。そこでBは自己の保險價額の六分の一即ち四萬一千六百六十六圓を填補する。

このうち、第一の方法は、前の保險者たるAによつて填補されずに残つてゐる額をBによつて

28) M. I. A. 1906., § 32. (II. b.)

29) 30) Ritter, C., a. a. O., S. 272.

填補するのである故に、最高保險價額に相當する額の填補をなすこととなる。従つて、被保險者を何等不利の地位に置くものではない。併し、第二の方法は、成る程各自の保險價額に對する割合に於てはその填補は六分の五と六分の一となつて完全な填補をなした如くであるが、各自の保險價額が異なるためにその絶對合計額に於ては最高保險價額以下の填補をなしてゐることになる。従つて、この方法は猶ほ上述の英國海上保險法に於ける缺陷を充たし得てゐるとは言へない。

(二) 保險者相互間の分擔關係

總額責任主義を採る英國海上保險法は、保險者相互間の分擔關係について、先に掲げたる如く、「各保險者ハ自己ノ引受ケタル保險金額ノ割合ニ應ジテ他ノ保險者トノ間ニ比例的ニ損害ノ分擔ヲ爲スベキ義務ヲ有ス³¹⁾」と定めてゐる。併し、この規定は上に説明したる保險價額が同一なる場合に適合するものであつて、以下に取扱はんとする保險價額の異なる場合にはそのまゝ適用され得ない。この意味に於て、右の規定はあらゆる場合に妥當する充³²⁾分なものとはいふを得ない。

(註) アーノードも、「保險價額の異なる重複保險に於て、被保險者に填補したる額を如何に保險者相互間に分擔さすべきかの問題は英國海上保險法(一九〇六年)の分擔規定によつては、解決され得ない。」との意見を述べてゐる。³³⁾

何となれば、保險者の分擔額をその引受保險金額の割合によつて定めるといふことは、各自の保險價額を同一額なりと前提し、従つて、引受保險金額の割合が取りも直さず各保險者の損害負擔比率を示すからであつて、若しこの前提條件たる保險價額の同一でないといふ場合には各保險

31) M. I. A. 1906, § 32. (II. a.)

32) 同様のことは我が商法387條第1項についても言ひ得る。

33) Arnould, op. cit., § 354.

金額の割合はもはや各保険者の損害負擔比率を示さなくなるからである。それでは、各保険價額の異なる場合には如何なる分擔方法をとるべきであるか。

第一の方法 保険者各自の分擔額をその引受保険金額の割合によつて定めるといふ上述の規定³⁴⁾は、それが各保険價額を同一なりと前提してゐる限り、各保険契約の損害負擔比率によつて分擔額を決定しやうといふ正しい根本原則のもとに立つてゐる。いま、この根本原則に立つて各保険價額の異なる場合の分擔方法を如何になすべきか、例をもつて説明する。こゝに次の如き重複保険があり分損三千圓が発生したとする。

保險者	保險金額	保險價額
A	六、〇〇〇(円)	九、〇〇〇(円)
B	五、〇〇〇(円)	六、〇〇〇(円)

この場合、A、Bの損害負擔比率は夫々 $\frac{p}{q}$ 、 $\frac{p'}{q'}$ となる。併し、これらの比率をもつて直ちに各々の分擔額を定めることは出来ない。これを比例的に按分したものをもつてその分擔比率としなければならない。

$$\begin{array}{cc} \text{Aの分擔比率} & \frac{\frac{p}{q}}{\frac{p}{q} + \frac{p'}{q'}} \\ \text{Bの分擔比率} & \frac{\frac{p'}{q'}}{\frac{p}{q} + \frac{p'}{q'}} \end{array}$$

これに所定の數字を當てはめると、A、Bは夫々 $\frac{4}{9}$ 、 $\frac{5}{9}$ となり、これに分損額三千圓を乗す

れば、Aの分擔額は一、三三三圓、Bの分擔額は一、六六七圓となる。

右は、各保険者の正しい損害負擔比率による分損額の按分である。而して、その結果を見るとAは保険金額・保険價額ともにBのそれよりも大であるに拘らずその分擔額に於ては却つてBよりも小である。これは一見矛盾する如くである。併し、損害負擔比率がAに於てはBに於けるよりも小なるためにその按分の結果たる分擔額がBよりも小さくなつたのであつて、損害填補の原則上當然のことといふべきである。

けれども、こゝに注意すべきは、右の分擔方法がすべての損害の場合に適用され得ないといふことである。即ち、損害額がいづれかの保険價額を超えたる場合及び全損の場合には右の分擔方法を用ひ得ないといふことである。³⁵⁾ 何故にさうであるか。例によつて説明しやう。次の如き重複保険の場合に於て、

保険者		保険金額		保険價額	
A	六、〇〇〇 _円	九、〇〇〇 _円			
B	四、〇〇〇	四、〇〇〇			

右に述べた分擔方法によれば、各保険者の分擔比率はA、Bに於て夫々 $\frac{2}{5}$ 、 $\frac{3}{5}$ となる。従つて、いま、分損額を七千圓とすれば、分擔額はA、Bそれぞれ二、八〇〇圓、四、二〇〇圓となり、Bは自己の保険金額並びに保険價額以上の分擔を要求せられることとなる。全損（この場合は損害額九千圓）に於てこの矛盾が更に甚だしくなるは言ふまでもなく明かである。

35) Ritter, C., a. a. O., S. 273., Arnould, op. cit., § 354., Clarus, op. cit., p. 26.
 36) Arnould, op. cit., § 354., Clarus, op. cit., p. 26.

以上の如き理由から、この分擔方法は、正當なる損害負擔比率に基いて分擔額を算定するといふ點に特徴も長所もあるけれども、實際上の適用に於てあらゆる場合に妥當する方法といひ得ない。

第二の方法 第二の方法として擧げるのは、保險價額の同一なる場合の分擔方法を保險價額の異なる場合にも適用することである。これについては、既に簡單な批判をなしたところであるが、英國の海損精算者たちの間に於て實際に各保險價額の異なる場合に用ひられてゐることであり、一應これを吟味して置く必要がある。

次の如き重複保險の場合に於て、

保險者	保險金額	保險價額
A	六、〇〇〇 _円	八、〇〇〇 _円
B	二、〇〇〇	一〇、〇〇〇
C	三、〇〇〇	四、〇〇〇
D	四、〇〇〇	八、〇〇〇

全損が發生したとすれば、それに對して填補すべき額は最高保險價額たる一萬圓である。ところが、これが重複保險でなく各契約が獨立する場合として考ふれば、全損の發生に於ては、各保險者は夫々自己の引受保險金額相當額の填補をすべきである。併し、そうすればそれらの填補額の合計は一萬五千圓となつて最高保險價額を五千圓超過する。故に、各保險者はこの最高保險價額

37) Arnould, op. cit., § 354., Clarus, op. cit., p.25.

一萬圓を各保険金額の割合に應じて

保險者	各保險金額の最高保險價額に對する割合	分擔額
A	$\frac{6}{15}$	四、〇〇〇 _円
B	$\frac{2}{15}$	一、三三三
C	$\frac{3}{15}$	二、〇〇〇
D	$\frac{4}{15}$	二、六六七
合計	$\frac{15}{15}$	一〇、〇〇〇

このやうに分擔する。

いま、この分擔額算出方法を見るに、それは各自の保險價額に全く無關係に行はれる。³⁸⁾尤も、「全損の場合に保險者が填補するのは保險金額であつて保險價額ではない。従つて、右のやうに保險金額の割合によつて分擔額を定めることは少しも不合理でない。分擔額算出に當つては、全損に關する限り、保險價額を考慮する必要がない。」このやうに考へることも出来る。併し、既に填補額として異なる數個の保險價額のうち最高保險價額を採つてゐる以上、保險價額に全く無關係に分擔額を定めることは出来ない筈である。例へば、上掲の例に於て、Bがその保險價額を一萬圓としたが故に各保險者の填補額合計が一萬圓となり各々の分擔額も決定せられたのであつて、若しBがこれと異なる所の保險價額を定めてゐたとすれば(他の保險者についても同様)その填補合計額並びに各保險者の分擔額はそれに應じて異つてゐたであらう。それ故、保險價額を分擔方法に於て

38) Arnould, op. cit., § 354., Clarus, op. cit., p. 25.

如何に考慮すべきであるかは別として兎に角にこれと（即ち各保険價額と）全く關係なくしては分擔額を算出すべきでないやうに思はれる。

第三の方法 次の如き重複保險の場合に於て、

保險者		保險金額	保險價額
A	六、〇〇〇	四、〇〇〇	九、〇〇〇 _円
	四、〇〇〇		
B	六、〇〇〇	六、〇〇〇	

先づAが二つの保險價額の差額三千圓を支拂ふ。次にこの差額三千圓をAの保險金額より差引きその殘額三千圓とBの保險金額四千圓との割合に於て六千圓（Aの保險價額より先きの支拂額三千圓を差引きたる額）を按分して、次のやうに各々の分擔額を定める。³⁹⁾

A の分擔額	6,000 _円 × $\frac{3}{7}$ 2,571
B の分擔額	6,000 × $\frac{4}{7}$ 3,429
合 計 5,992

この方法は、最初にAがAの保險價額とBのそれとの差額を支拂ふところに保險價額の差異について考慮を拂つてゐるといふことが出來、次に、かくすることによつて一應保險價額を技術上同一とならしめこの（同一なる）保險價額相當額を各保險金額（Aに於ては最初の支拂額が控除されたる保險金額）の割合によつて按分して分擔額を定めるところに保險金額の差異についても考慮を拂つてゐるといへる。この意味に於て全損に對するものとして、これは先きの第二の方法よりもより合理

39) Ritter, C., a. a. O., S. 273., Arnould, op. cit., § 354., Clarus, op. cit., p. 26.

的であるといへる。⁴⁰⁾

併し、この分擔方法に於てもなほ次のやうな短所がある。例へば、次の如き重複保険に於て、この方法を用ふるとすれば、

保險者		保險金額		保險價額	
A		六、〇〇〇 _円		九、〇〇〇 _円	
B		四、〇〇〇		四、〇〇〇	

各保險者の分擔額はAに於て六、三三三圓、Bに於て二、六六七圓となる。これを先きの場合の分擔額と比較すれば填補額（最高保險價額たる九千圓）及び各保險金額は同一であり乍らたゞBに於ける保險價額が六千圓より四千圓に變化したゞけの理由のために、Aは七六二圓だけより多くの填補を要求せられる。殊に、謂はゆる損害負擔比率について見るに、Aに於ては前の場合と同じく $\frac{6}{9}$ であるがBに於ては前の場合よりも増加して1となつてゐる。従つて、この損害負擔比率だけから言へばBは當然に前の場合よりもより多くを填補すべきである。而るに、この分擔方法を採るときBの分擔額は却つて七六二圓だけ減少してゐる。これは明かに大いなる矛盾である。而して、いま、この矛盾の原因を考へるに、それはAが最初に五千圓（Aの保險價額とBのそれとの差額）を支拂ふことが充分の妥當性をもち得ないことに存すると思はれる。これはこの兩者の差額が大であればある程甚だしくなるところの缺點である。かやうな意味に於て、この第三の方法も正しいと言はれ乍ら場合によつて甚だしい缺陷を現はすわけである。

40) Arnould, op. cit., § 354.

六、結 言

以上、海上重複保険に於ける填補並びに分擔方法、特に、最も多くの困難の横はるところの各保険價額の異なる場合の填補並びに分擔方法について考究したつもりである。而して、この稿は、大體に於て、海外の先輩諸氏の所説を纏めて整序し、これらのものに關して不充分と思はれる點につき私見を加へ批判したものである。

要するに、海上重複保険の填補並びに分擔方法として現今行はれる總額責任主義のそれは、大體に於ては便宜であり合理的であり、殊に各保険契約の保険價額が同一なる場合に於てさう言ひ得るのであるけれども、各保険價額の異なる場合に於ては、法規の上にも實際の上にも、甚だしく不備不完全であるといはざるを得ない。而して、それがこのやうに不備不完全のまゝに残されてゐるは、本稿に於て先きに觸れたやうに、各保険價額が異るときその最高の保険價額をもつて填補すべき額（全損の場合として）とするといふ前提そのものが、先づ検討さるべき問題たるに拘はらず、それが充分に検討されず未解決のまゝに置かれてゐる故である。實に、この前提たるところの問題が解かれ、填補すべき額が正しく決定された上で、正しい分擔方法が発見されるのである。先づ爲すべきはこの前提問題への考察である。私は、以上の研究をなした今、この感を深うしこの結論を得たのである。而して、この問題は海上保険に關心をもつ者として今後考究すべき興味ある一つの題目といふべきである。